



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成20年7月25日

通巻57号

特定非営利活動法人 日本下水道文化研究会 第12回総会報告

平成20年6月14日(土)市ヶ谷の日本水道会館7階会議室を会場として、13時30分より、第12回総会が開催されました。

総合司会の佐藤委員の開会の辞に続き、酒井代表より、「今回実施したアンケートに寄せられた皆様の声を生かした会の運営を行っていききたい」との趣旨の挨拶が行われ、第1部の平成19年度分科会・支部活動報告へと進行いたしました。

まず、酒井代表より、本会の活動報告がなされました。第9回研究発表会および下水道文化を見る会の開催。3回の定例研究会の開催。バルトン記念事業の開催。機関誌19号の発行、ふくりゅうの発行。多摩源流祭参加などが報告されました。

尿尿・下水研究会からは、地田副代表よりパワーポイントを用いて報告がなされました。本年開催した5回の例会の中から、第49回開催『「トイレのひみつ」刊行のいろいろ』を例とした、講演概要の説明。特別企画として2回の見学会の実施とその概要。講演内容の活字化と普及に関して、各業界紙への投稿実績とその概要報告が、また、声のライブラリーとして、講演をCD化して将来に残して行く事業説明がなされました。

海外技術協力分科会からは、高橋委員よりJICA草の根技術協力事業・イオン環境財団助成・TOTO水環境基金助成などの受託・助成を受けて行われた、本年度の活動報告が行われました。活動場所をバンラデシュの地図で示し、洪水などの災害が多発するという特質をふまえ、衛生改善にとどまらず災害の影響を受けにくいことを視野に入れた活動内容が報告されました。また、賄賂社会に屈せず活動していく所信が表明されました。

関西支部からは、木村関西支部長より報告がなされました。関西支部では、PR活動、市民活動に関する事。講習会開催の事の2種を柱に据えた活動の詳細が報告されました。各種イベントへの参加9回、見学会、講習会、パネルディスカッション、水を語る会の開催。関西水環境ネット、他NPO・市民団体との協働。「関西支部だより」の発行などの報告がなされました。

各分科会・支部活動ともに、その報告は、熱のこもった気迫を感じるものであり、日頃の熱心な活動ぶりを十分に感じ取れるものでした。

第2部総会では、議長に木村関西

支部長が選出され、委任状を含め107名の出席で総会成立の確認がなされました。議案書に予定されていた、下記の各議案に関する報告、提案がなされました。

第1号議案 平成19年度事業報告の承認ならびに会員現況報告(佐藤委員報告)

第2号議案 平成19年度収入支出状況報告(佐藤委員報告)

平成19年度会計監査報告(谷口監事報告)

第3号議案 財産目録(佐藤委員報告)

第4号議案 平成20年度事業計画(酒井代表提案)

平成20年度特定非営利活動に係る事業会計予算書(佐藤委員提案)

第5号議案 議事録署名人の選任(酒井代表提案)

会場からは、ホームページの有効な運営に関する提言も出され、本会の更なる充実と発展を予感させる中、全ての議案は滞りなく承認され、15時10分閉会となりました。

引き続き今回は、特別上映として、バンラデシュ国営放送製作の「エコ・トイレット」、大友慎太郎氏製作の「うんこのススメ」が上映されました。いずれも、海外技術協力分科会、尿尿・下水研究会の活動の成果の一端が良く表現されており、本会の活動内容の深さを改めて認識させられる上映となりました。

16時から、懇親会が開催され、例年どおりのなごやかな雰囲気の中、新たな活動への思いを語りつつ、お開きとなりました。

(運営委員 森田英樹記)



総会・懇親会の後で

本会の活動内容に関するアンケート集計結果について

1. はじめに

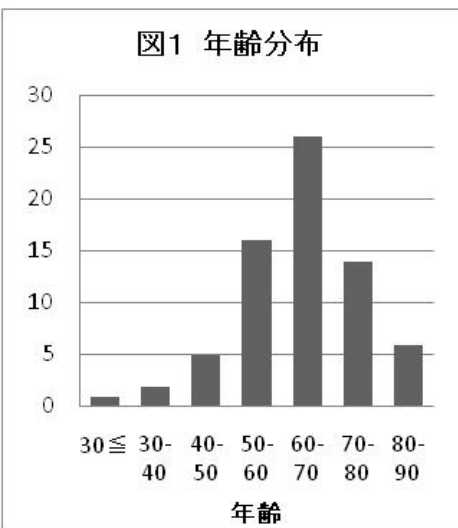
以下は、本年5月に行った本会の活動内容に関するアンケート結果を取りまとめたものである。ふくりゅう56号に掲載したように、「賛助会員の減少」、「正会員数の横ばい状況」さらには「会費未納者の増加」と「会費収入の減少」が近年の顕著な特徴である。本アンケート調査は、会員の本会運営や活動内容に関する態様を把握し、今後の運営方針の一助とすべく行ったものであり、その結果について要約する。

2. アンケート調査内容

アンケート調査は以下の13項目から構成した。「問1. 入会の動機」、「問2. 本会活動への関心」、「問3. “ふくりゅう”についての関心」、「問4. 機関誌についての関心」、「問5. 下水文化叢書などの出版物についての関心」、「問6. “ふくりゅう”で印象深い記事」、「問7. 機関誌で印象深い記事」、「問8. 下水文化叢書、その他出版物で印象深いもの」、「問9. 定例研究会、研究発表会などの行事・イベントの開催と運営について」、「問10. 会費について」、「問11. 会員であることの所見」、「問12. 日本下水文化研究会の活動・運営について」、「問13. その他自由意見」である。アンケート調査は、正会員254名（平成20年4月1日現在）を対象として行い、そのうち74名（回答率29%）の回答を得た。

3. 回答者の属性

回答者の年齢は図1のとおりである。性別では、男性65人、女性5人であった。年齢は60-70代をピークとした分布を示しており、平均年齢は64歳である。本会が全国組織となったのが1992年ということもあり、明白な高齢化の状況にあることが示されている。なお、会員歴では、1999年のNPO法人格取得後入会した会員も回答会員の約半数を占めていた。

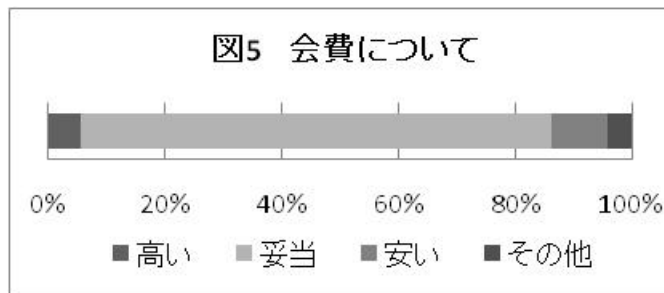
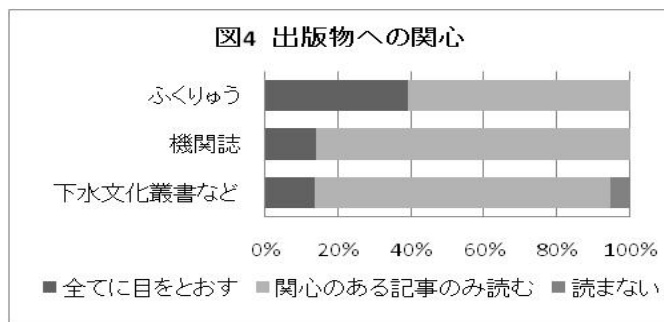
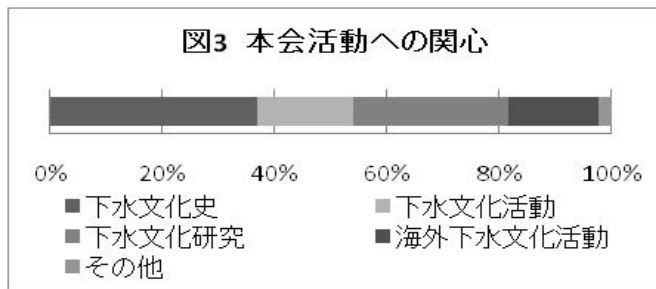
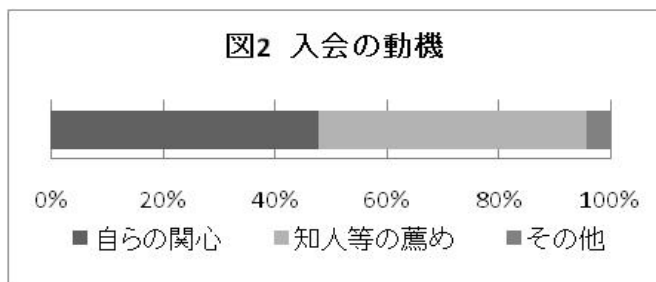


4. 本会に対する意識

図2に「問1. 入会の動機」、図3に「問2. 本会活動への関心」、図4に刊行物（ふくりゅう、機関誌、叢書など出版物）への関心（問3. ~問5.）、図5に会費についての結果を示す。入会動機は、自らの関心と知人からのすすめが同数であった。本会の活動分野（最近の研究発表会の分野）で最も関心のある分野については、下水文化史、下水文化研究への関心が高く、それぞれ37%、28%であ

た。本会の活動の成果でもある刊行物については、総じて高い関心を持って読まれていることがわかった。会費についても80%が妥当と回答しており、高いという回答は、安いという回答よりも少なく5%程度であった。

「問9. 定例研究会、研究発表会などの行事・イベントの開催と運営について」、「問11. 会員であることの所見」、「問12. 日本下水文化研究会の活動・運営について」の調査結果は、おおむね次の通りであった。行事、イベントの企画については、「妥当である」が87%、会員であることで何か得るものがあるという回答は87%、本会の活動・運営に満足という回答は80%であり、一定の評価を得ていると判断できよう。



5. 本会に対する意見等

表1・2に、ふくりゅう、機関誌、下水叢書などの刊行物でとくに興味をもった内容と自由意見を示す。自由意見には、各設問項目に対して具体的に回答された内容も含めて表示している。出版物、記事等についての会員の関心は多岐にわたっていることがうかがえる。回答数は示していないが、江戸の下水やバルトンなどに代表される下水文化史に関わる内容が顕著である。とともに、バングラデシュでの海外活動への関心も見逃せない。

さまざまな自由意見は、本会のこれからの活動に対する意見・提言としてとらえると、これから、どのような活動を行い、どのような会員構成を指向していくのかとい

う課題が浮かび上がる。高齢者の多い現会員の多くが、下水文化史・下水文化研究に関心を寄せている現状と、会の継承のため、若い世代の会員の確保という重要な課題が控えている。また、研究会、イベントなど活動の場が東京、大阪に偏しているという事実に対し、それ以外の地域への伝播・多様な地域の会員間の交流も課題となろう。このような世代間、地域的な偏りなどの現状から、今後を見通した場合、従来、主として運営委員が行ってきた情報発信にとどまらず、ホームページの活用（例えば掲示板コーナー作り）なども会員相互の情報交流の有効なツールとなるであろう。

“社会に貢献している手ごたえが無い”という一会員

からの意見は重要な示唆を与えている。本会のこれまでの様々な活動とその記録である機関誌や叢書、海外技術協力活動などの実績は、果たして“社会に貢献していない”活動であったか、PRが十分であったかどうかも含めて検証しておくことも必要となろう。

こうした貴重な意見が見出せたことから本アンケート調査は意義があったと考えます。ご協力ありがとうございました。（文責：酒井彰・高橋邦夫）

表1 印象深い記事や内容等

ふくりゅう	機関誌	叢書等
<ul style="list-style-type: none"> ● 旧事九官録 ● 下水道制度 ● 尿尿・下水研究会報告 ● バルトン関連 ● バングラデシュ海外活動・報告 	<ul style="list-style-type: none"> ● 下水川柳 ● 森林から水環境を考える ● 国際協力 ● 水文化のネットワーク ● ロンドンの下水道 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸の下水・江戸の文化 ● 近世三都の水事情 ● 下水川柳 ● 便所異名集覧 ● ゴミの文化・尿尿の文化 ● トイレ考・尿尿考 ● 三大地震写真集

表2 自由意見

- 会費・資金：会費値上げに踏み切ったらどうか／会費は安い／3000円が妥当／会費は寄付のつもり／会費未納者対策を厳格に／企業の資金協力を得る
- これからの活動提言：下水道のこれからの展開／縦割り行政への視野／海外技術協力を増やす／水文化の国際比較／郷土下水文化史の探究／研究活動を充実させる／定例研究会の充実
- 会員・参加者：増やす工夫を／若い人や学生が入りやすい仕組みを作る必要／地方会員を増やす／一般市民の参加
- 交流：HPの活用（掲示板づくりなど）／人とのつながり
- 要望：地方でのイベント開催／身近な下水の記事をもっと
- これまでの活動の評価：下水文化史関連の文献・資料等は貴重／社会に貢献している手ごたえがない

北海道大学・サステナビリティ・ウィーク2008-G8サミットラウンド

衛生に関する国際シンポジウムに参加して

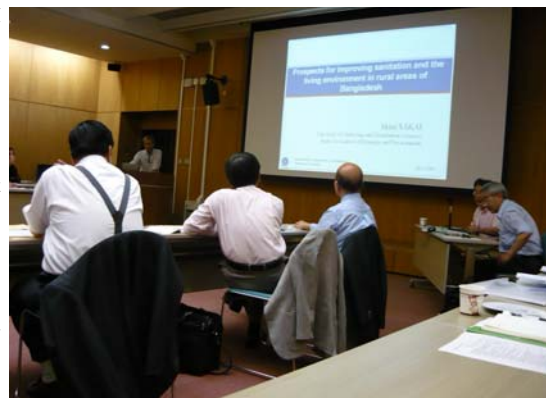
運営委員会代表 酒井 彰

北海道大学では、「持続可能な社会」の実現に貢献する研究と教育を推進させるため、「サステナビリティ・ウィーク」を例年開催しているが、今年は先日行われた洞爺湖サミットに先駆け、6月下旬から7月上旬にかけて開催された。このプログラムの一環で、7月6日（日）北海道大学・学術交流会館で行われた“International Symposium on Sanitation in Hokkaido University”に参加し、バングラデシュでのエコサン・トイレ普及活動について報告する機会を得た。実は、この企画が北大船水尚行教授のもとで進められていると聞き、佐藤運営委員から参加を持ちかけたところ、快諾をいただいたものである。

当日は、北海道内で行われている複数のJICA研修プログラムに参加している研修生が多数参加し、国際色豊かなシンポジウムとなった。プレゼンターは、船水教授、高

知工科大学・村上雅博教授、JBIC 専任審議役橋本和司氏、JICA 地球環境部坂田氏のほか、フィリピンとインドネシアの大学教授からもそれぞれの国の実情が伝えられた。

私の発表に対して



シンポジウム風景

は、受け入れ側のカルチャーの問題、コスト負担などについてアフリカの研修生から質問があった。嘉田滋賀県知事が言われていた「うんこ親和文化」、「うんこ忌避文化」という言葉が思い出されたが、この点は船水教授の講演でもふれられていた。うんこ忌避文化圏と考えられていたムスリムの国であるバングラデシュでは人糞に触れる習慣は全くなかったが、まさに土に還った乾燥便に対し忌避的反応は見られなかったことを伝えた。我々は、うんこの生まれ変わりにお世話になっているのであり、どの状態までを忌避するのかというのは、文化人類学としても面白いテーマだと思う。コストについては現場で入手可能な材料で作ることを原則に、コストダウンの工夫が必要といった回答をした。

村上教授の発表では、ニジェールで、パイプウォーターを普及させたら、都市下流にあるかんがい水路の汚染が問題になったという経験談が印象に残る。水供給と衛生

や排水を併せて考えなければならないことを示す事例である。そして、船水教授は“don't mix”と“don't collect”を目指した wastewater の管理を主張された。この分野にかかわっている人たちの間では、オンサイト派、パイプ派があるらしいが、ミレニアム開発目標のターゲットになっている多くの地域では、オンサイトでの管理が優先される地域の割合がかなりを占めるだろうという感覚はある。とくに、共同利用施設の管理がなかなかままならないバングラデシュ農村では、意識の啓発、オーナーシップの面からも、オンサイトでの管理が求められよう。

涼を求めての札幌行きであったのに、猛暑であったのは残念だったが、有意義な情報交換ができたと思っている。

最後に、われわれのプレゼンテーションをプログラムに組み入れていただいた船水教授ほか、関係者に謝意を表します。

第51回尿尿・下水研究会報告「消えゆく下水処理設備を映像に残す」

平成20年6月13日（金）、東京・新宿のTOTO新宿ショールームのプレゼンテーションルームにおいて、第51回の尿尿・下水研究会例会が行われました。講話者は、本会会員の竹島正氏（現日水コン、元東京都下水道局）で、自ら製作したビデオ映像を放映しながら、適宜解説を加えるという手法で講話を進めていただきました。事前に配布されました講演要旨を以下に紹介します。

1. 東京都下水道局森ヶ崎水再生センターに勤務していた当時、年々設備更新が進み、従来型の設備が撤去されていく状況を目の前にして、これらの一時代の下水処理や汚泥処理を担ってきた技術を生きた教材として後世に残すため、運転している状態でのこれら設備をビデオに記録することにした。
2. 映像アーカイブ化の背景
 - 設備更新後は従来設備に関する技術経験は受け継がれず、過去の経験が活かされにくい。
 - 大量の退職者が出る時代になっており、技術や経験を残す場が必要となっている。
 - 映像記録は図面では表現できない騒音や照度など実際の設備の運転状況を伝えることができる。
 - 維持管理部門はとかく仕事の成果がみえにくい、目に見える成果品として職場に残すことができる。
3. 現時点の担当者が資料を整理し、本ビデオに出演しそれぞれの設備について説明してもらった。

4. 作品の紹介

①「ミューダー型汚泥掻寄機」：昭和42年稼働の森ヶ崎水再生センターの最終沈殿池（24池）には、ミューダー型という他の場にはないユニークな汚泥掻寄方式が採用されている。その理由は、建設当時リンクベルト型は未だ導入事例も少なく、それまでのサイホン型採泥機のもつサイホン切れという欠点を解消でき、しかもサイホン型と同様に水中に駆動部がない丈夫な構造が着目されたためである。往復運動や掻寄板の上下操作など、制御には多数のリミットスイッチが使われている。

②「ベルトフィルター型真空脱水機」：昭和47年に設置された真空脱水機は、機械台数24台を有し全国的にも有数な大規模設備である。石灰・塩化第二鉄の無機凝集剤を用いた汚泥脱水機としては、東京都に現存する唯一のものである。平成20年度末には休止の予定である。

③「多段炉型汚泥焼却設備」：昭和58年に南部スラッジプラントで稼働した多段炉（300トン炉2基）は、真空脱水機から産出される石灰ケーキ用の焼却炉である。高分子凝集剤を用いたベルトプレスや遠心脱水機から産出される高分子ケーキの焼却には不向きであることから、汚泥焼却炉は流動炉に移行している。東京都では、この2基が最後の多段炉となった。平成20年度末に休止の予定である。

（運営委員・地田修一 記）

バングラデシュ便り4号 (July/2008)

モノ・カルチャー

運営委員 高橋 邦夫

BARD (Bangladesh Academy for Rural Development) はこの国に多く存在する農村開発教育機関のひとつである。BARD は年間にわたって、主としてバングラデシュ国内から研修生を受け入れ、数日から長いものでは4ヶ月に渡る教育研修を行っている。テーマは、農業開発、健康、栄養、保健、女性問題など多岐に渡り、いわば国立

農村研修センターとあってよいだろう。ふんだんな緑に囲まれたキャンパスは広く、年中通して花々の絶えない庭園、運動施設、ホステルなども整備され、休日には一般市民に公開されるなど、近隣の観光名所にもなっている。また、構内のカフェテリアのカレーの味は評判が高く、数少ない日本のガイドブックにも紹介されている。

BARD は旧パキスタン時代からの歴史を持ち、1959年 PARD として発足した農村開発機関であり、所謂、緑の革命に大いに貢献し、世界的な注目を集めたこともある。また、近年注目されている、ユヌス教授のグラミン銀行に象徴される小規模金融システムのおおもとは、BARD の手がけた農村開発活動の一環に根ざすものとされる。

そんな BARD に 30 日を超える滞在となったが、結論的に言えば、毎日カレーを食い続けることは断念せざるを得なかった。カレーは確かに美味しいが、要するに飽きが来るとともに、それから逃避したくなる心理が増幅してくるのである。バングラデシュの人々の主食はカレーであり、よく食べる。それも飽きが来ないという。右手の指先で器用に食する彼らの食い方を何度か試みたものの、指先になじまないインディカ米は、ポロポロとこぼれる。口に運ぶ過程でさらにこぼれる。次第に食い散らしの状態になっていく。それに引き換え、彼らの食べ方は見事である。最後には皿はきれいに指先でぬぐわれ、あえて皿を洗う必要の無い状態になるのである。

勿論カレーのメニューは豊富である。魚カレーは、用いる魚の数だけ種類があるわけである。野菜にしても同様である。が一旦香辛料の薬臭さと、ふんだんに入った油が鼻に付き出すとそれらは十把一絡げ、逃避の対象となる。そして逃避の対象は、もっとも食べやすいと思われるチキンカレーなどにも伝染していく。さらに大きなカフェテリアで、多くの研修生の発する独特の横隔膜を振り絞って放つような唾を吐き出す音の連発は、逃避コンフリクトをさらに助長する。結局滞在も一週間を過ぎようとしたころ、1日3回のうち、1回はカレーを断念し、パンやカステラ、揚げ物、バナナの類でごまかすことにした。

話は変わるが、農家をまわっていると気がつくのは、道具立ての少なさである。食料などの裁断は、鎌の刃先を縦にこちら向きにしたようなものしかなく、包丁、ナイフの類は見かけない。そして俎板を未だ見ていない。農具は柄の短い鍬と鎌のみである。スコップの類は道路補修などの際、ごく稀に見かける程度である。町の鍛冶屋を数件視

いてみたが、やはりこれしかない。和料理人の持つ包丁の種類の豊富さと使い分けの見事さや、稲麦の刈入れで異なる鎌、筍ほり、長薯ほり専用、といった幾種にもわたる農具の準備もない。

食文化はさまざまな生活様式のうちで最も興味深い。生物生存の基本的欲求に立脚したものであると同時に、五感をフルに活用した魅力ある行為であるからであろう。味わいは、地場固有の素材を見、触れ、嗅ぎ、噛み、呑み込み、排泄するというさまざまな変換過程を経ることになる。右手の指先のみで食することは、おのずから食い物の調理を制約する。指先が使用可能な料理は、料理から熱さのもつ美味さを無視せざるを得ない。熱いステーキや、スープや麺の類はまず食えないだろう。

日本の場合はどうか。どんなに美味しいラーメン、そば、うどん、刺身、てんぷら、鮭、丼物、鍋料理でも、同じものを食べ続けることはできないだろう。しかし、矛先を変えるに十分な種類の食が控えているのである。つまり、食の種類が豊富であり、容易に選択できるところに特徴がある。

道具立ての少なさや、宗教上の教義から右手の指先で食する慣習は、生活様式の選択の幅を限定するのは確かであろう。にもかかわらず、単調としか思えないカレーに長年の好みを培ってきた人々の趣向をとにかく言えたものではない。その証拠に、日本へきた彼らが、日本食を口にしたとき、美味そうな顔をしたものを強いてあげれば、梅干、さばの塩焼き、オデンの煮込んだ卵しか確認できなかったのは事実である。



魚を断つ（ラジャヒのマーケットにて）

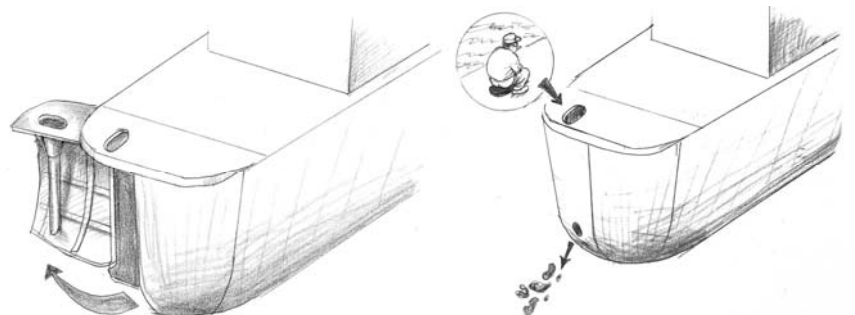
旧事九宮録 巻6

長魚 3705 の事

運営委員 森田英樹

総トン数44トン。全長29.68メートル。型幅4.66メートル。速力33ノット。船名、長魚3705。平成13年12月22日に発生した、九州南西海域工作船事件において、沈没した船である。連続最大出力は、約4400馬力で、一般的な漁船の約10倍の馬力を持つ。少し昔の事件でもあるので、海上保安庁の資料を元に、簡単に事件の概要を説明する。九州南西海域を航行中の不審船は、巡視船・航空機による度重なる停船命令を無視し、ジグザグ航行をするなどして逃走を続けたため、射撃警告の後、威嚇のための船体攻撃を行った。同船は引き続き逃走、巡視船に対する攻撃を行ったため、正当防衛射撃を実施した。結果、自爆と思われる爆発を起

し、奄美大島から西方約390キロ付近海域に沈没した。後に、この不審船は北朝鮮国籍の工作船で、乗組員についても北朝鮮国籍であるとされた。沈没から約9ヶ月後の、平成14年9月11日、海底から引き上げられた。クリスマス迫る、平成18年12月23日。私は同僚2人



との出張の帰り。時間も少し早いし、横浜の赤レンガパークにでも寄ってみようとの声。まあ、日のある内なら、背広姿のおじさん3人が若者に紛れていても不審がられまい。案の定、パークはカップルで溢れている。明らかに場違い。そんなパークの片隅に、夕日を浴びて光る建物。「工作船展示館」の文字が。「はて、もしかすると」近寄り見ると「入場無料」の文字。しめしめ、タダより安いものはない。足早に入口を入ると正面には、赤茶け錆びた船らしき鉄塊。左を見れば受付嬢。「艦内にはトイレはありましたか？」とっさの一言であった。受付嬢曰く「すみません、カンナイにはトイレはないんです」え？何で、すまないの???

一通り船体の様子や、展示品を見終わると、私の隣に説明員らしき人が。今一度の挑戦「艦内にはトイレはありましたか？」説明員曰く「館内にはありません」なるほど！そうだったか！！では、最後の挑戦「この船には、トイレはありましたか？」「ああ、これです」「はあ」あまりにも、拍子抜けの回答であっ

た。示された先を見上げれば、和式便器がすっぽりと収まる程度の小判型の穴が。

工作船は、その内部に全長11.21メートル。全幅 2.5メートル。総トン数2.9トンの小型船を格納していた。そのため、艦尾は、小型船を収納するため、観音開きで大きく開閉する仕組みになっていた。屎尿は艦尾船上の穴から、ロート状の管を伝わり、艦底の喫水線下の穴から海中に放出されるわけだ。それにしても、船体に空けられた小判型の穴の位置と、扉上部に空けられた小判型の穴の位置とを、ぴったり一致させたり、管を何カ所も溶接したり、なんとも便所にしては、手の込んだ細工だ。誰はばかる事のない大海原にもかかわらず、人の目に留まらぬように海中に屎尿が没する仕組みも、不思議なほど奥ゆかしい。

17時の閉館時刻が迫っている。大急ぎであらゆる角度から写真を撮りまくる、1人御満悦。時刻となり退館。しかし、未だ興奮と喜びさめやらず。ニヤニヤ、ニヤニヤとカップルの間を縫いながら、夜景きらめく赤レンガパークを後にする羽目になってしまった。

第53回屎尿・下水研究会例会のご案内

日時：9月25日（木）18時30分～20時30分

場所：TOTO スーパースペース（新宿エルタワー26階）、
プレゼンテーションルーム（JR新宿駅西口より徒歩5分、電話：03-3345-1010）

演題：「生活改善運動とトイレ・上下水道」

講師：小峰園子氏（葛飾区郷土と天文の博物館）

内容：日本の近代の歴史において、西洋の「衛生観」が広まったことは庶民の生活に大きな変化をもたらしました。特にトイレや飲み水に関する慣習を近代的で清潔なものへと変化させることは、生業や暮らしぶりまでをも変容へと促すものであったのです。大正・昭和期の農業村における旧来の生活文化を、より近代的なものへと変える目的のあった「生活改善運動」にスポットを当て、その内容を紹介し、トイレや上下水道に関する文化がどのような変化を見せていったのかについて考えていきたいと思います。

運営委員会・事務局より

- アンケート結果をお知らせしましたが、今回は結果の報告ということで、今後本会の運営にどう反映させていくかについては、運営委員会で議論していきたいと思っております。貴重なご意見をいただいた会員の皆様に感謝申し上げます。
- 5月に総会案内等とともに会費の請求をさせていただきました。運営委員会からは、未納会員・未払い額ともに少なくないことが会の収入状況を厳しくしていることを前号のふくりゅうおよび総会において訴えさせていただき、会費納入状況は例年に比べると順調のようですが、未納の会員の方は速やかにお納めいただきますようお願いいたします。
- 本年度総会資料では、個人会員の数が30名程度減少しておりますが、これは3年以上未納の会員を退会したものとみなすという定款10条の規定を厳格に運用したためですが、この間会員サービスは提供しておりますので、さかのぼって会費の請求はさせていただきます。また、会費を納入された場合は、会員として復活措置をとっております。
- 会費の請求の際に寄付を募らせていただきました。本年度はバルトン記念事業への寄付を併せてお願いしました。さっそく多くの会員諸兄姉より、寄付をいただいておりますことをお伝えし、感謝申し上げます。
- 総会でも議論があり、アンケートでも意見をいただいておりますが、ホームページでの情報提供の迅速化、ホームページを情報交換のツールとしてもっと活用することなどにも取り組んでいきたいと考えておりますので、会員の皆様からの具体的な提案もお待ちしております。

編集後記 会員の皆様から協力いただいたアンケート結果を集計し、80%を超える回答者から活動内容は妥当であり、得るものがあるという回答をいただき、安堵の気持ちを持ちました。ただし、約30%という回収率から、70%の会員はどのようにお考えなのかということとは未知数であり、活動がマンネリに陥ることのないように、絶えず心得なければならぬと思います。（酒井 彰）

ふくりゅう 通巻57号 目次

第12回総会報告	1
本会の活動内容に関するアンケート集計結果について	2
衛生に関する国際シンポジウムに参加して	3
第51回屎尿・下水研究会報告「消えゆく下水処理施設を映像に残す」	4
バン格拉デシュ便り モノ・カルチャー	4
旧事九官録巻6 長魚3705の事	5

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>